園通りの午後

淳一

毎日新聞社

公園通りの午後

昭和五十三年六月三十日 第一刷
昭和五十三年七月二十日 第二刷

著　者　渡辺淳一
編集人　吉田掟二
発行人　高原富保
発行所　毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇 大阪市北区堂島
〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷　中央精版　製本　大口製本

© Junichi Watanabe *Printed in Japan* 1978

目次

少女の死　7
悪魔の知識　12
背骨を竹に　17
愚直の一念　22
地位と人　27
解剖　32
進歩のかげに　37
消えた業績　42
名医　47

死について 52
父のこと 57
古きブルージュ 62
自殺 67
ゴールデン・ウイーク 72
さまざまな立場 77
歴史の違い 82
安楽死 87
八年の動き 92
ある宿命 97
受験とDNA 102
北国の夏 108
癌の宣告 113

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

脚を伸ばす 119
体験の風化 124
仕事と疲労 129
もう一つの顔 134
余談ながら 139
外科医のいらなくなるとき 144
ある差別 149
生への執着 155
故郷の味 160
新しいカルテ 165
隠れた才能 170
誕生日 175
同窓会 180

もう一つの差別 185
名刺 190
医者の不養生 195
微熱のなかで 200
学位について 206
無に帰す 211
さまざまな幸せ 216
新しい年に 221
母のこと 226
雪、そして故郷 231
あとがき 236

公園通りの午後

少女の死

これまで、いくつくらいの死を見てきただろうか。
午後の陽だまりのなかにいると、ふと過去に見た死のことを思い出す。
厳しい死、やわらかい死、激しい死、優しい死、死にもさまざまな顔があった。
死はすべて無言だけれど、死に至る道程は一様ではない。一つ一つの死に意味があるように、そこへたどりつく道にも、人それぞれの裸の姿がでる。
死が訪れたときにこそ、その人の生きてきた証（あかし）を見ることができる。
陽のなかで目を閉じて、すぐ脳裏に浮かんでくるのは、十六歳の少女の死である。
その死を看（み）とったとき、私は医師になって二年目の二十六歳だった。
少女は脊髄に腫瘍ができて、下半身から胸のあたりまで痺（しび）れが拡がっていた。このまま放置していては、死を待つだけだった。
医局のカンファレンスの結果、腫瘍摘出術が決定されたが、それは成算のある手術ではなかった。
脊髄の上位にある腫瘍の摘出は、そのころでは、ずいぶん難しい手術であった。もちろんいまも、困難であることに変わりはないが。

少女の受持医であった私は、カンファレンスの結果を少女と、その母に告げた。
「このままでは、悪くなるばかりです。治すなら手術しか方法がありません」
そういってから、私は、「手術は難しいけど」と、つけ足した。
少女は、ムンクの絵に出てくるような、目の大きい聡明な子であった。
彼女は少し考えるように、明るい陽のさす窓のほうを見ていたが、やがて「して下さい」と答えた。
詳しいことは知らなかったが、看護婦の話では、付き添っている婦人は少女の義母だということだった。
なにか、それで不都合なことでもあるのかときいてみたが、看護婦は、「そんなことはありません。義理のお母さんでも、一生懸命看病されています」と答えた。
まだ幼いとき、少女は母を失って、父の再婚とともにいまの義母と一緒に暮らすことにでもなったのだろうか。
私は勝手に想像したが、それは病気とは関係のないことだった。
それから一週間後に、少女は睡眠薬で朦朧としたまま手術室へ運ばれた。手術はうつ伏せの姿勢でおこなわれるため、背まであった髪は切り落とされ、頭は白いターバンで巻かれていた。
手術は教授が執刀し、まだ新米医師の私は、三番目の助手で、筋鈎で創口を開いているだけだった。
だが、その私にも、手術が失敗であることはわかった。
開いてみると、腫瘍は脊髄神経そのものから発生し、まわりと強く癒着して、異常に膨脹した血管か蛇行していた。細心の注意を払いながら、電気メスをすすめてもすぐ出血し、たちまち血の海にな

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

る。
難しいとは思っていたが、これほどの難事とは思わなかった。数時間に及ぶ手術の結果、摘り切れたのは、半分にも満たなかった。
しかも長時間の創口の露出と出血で、脊髄神経を痛める結果になっていた。
どの医師も、なにもいわなかったが、少女の上に、死の影が近づいていることはわかっていた。
創口を閉じながら、私は、少女が麻酔から目覚めたときにいう言葉を考えていた。
「失敗でした」とはいえない。といって、「大丈夫です」ともいえない。
「できるだけのことはやりました……」
そんな言葉しかなさそうである。
その夜、遅くなって、少女の意識が戻ったとき、私はその言葉とともに「頑張るんだよ」と、脈をみていた手を握った。
少女は弱い呼吸のなかで、目をいっぱいに見開いてうなずいた。
だが、思ったとおり翌日から熱が出はじめ、翌々日には三十九度をこした。蒼白だった少女の顔は、赤くうるみ、解熱剤をうってもほとんど効果はなかった。
手術による負担と、脊髄の損傷が、急速に少女の体を苛んでいた。点滴から酸素吸入と、うつべき手はすべてうってあったが恢復の見通しはなかった。
「あと、四、五日かな」
病棟主任の先輩はそうつぶやくと私に、「死が近いことを家族に話しておくように」といった。

冬の陽だまりの午後、私が病室へ行くと、少女は熱でうるんだ眼で窓を見ていた。なにか用事でもできたのか、少女の義母はいなかった。

私が近づくと、少女は待っていたようにいった。

「いつごろ、退院できますか」

「まだ、はっきりはいえないけど、もう少し暖かくなったらね」

少女は一旦、うなずいたがすぐ、

「わたし、いま考えていたんですけど、今度退院したら、うんといい子になります」

「いまでも、君は我慢強いし、いい子だよ」

「違うんです。わたしはいままで我儘で、勝手で、自分のことしか考えていなかったのです。でも今度治ったら、きっとみなに優しくしてあげます。お友達にも、弟にも、お義母さんにも」

「お義母さんは、よく看病してくれるだろう」

「そうなんですけど、わたしはいままで抗らってばかりいたんです」

少女は熱で乾いた唇を軽く噛んだ。

「わたし将来お医者さんになろうかと思うんです。でもお医者さんになるのは難しいでしょうね」

「そんなことはない。君なら大丈夫だよ」

「もしお医者さんになれなかったら、看護婦さんでもいいんです。看護婦さんになるには、高校を卒業してから、看護学校に入ればいいのですね」

私はうなずいてから、ふと、この少女があと数日後に、この世から消え去ることに気がついた。三

日か四日か、あるいはもう少しあとかもしれない。
しかし一週間後、少女は確実にこの世にいない。
いまの最高の医学を駆使しても、巨万の富をもってしても、権力者の絶大な力をもってしてもその事実は変えられない、死は彼女に約束された未来である。
「わたし、看護婦さんになったら、苦しんでいる患者さんに、うんと親切にしてあげます」
少女はあきらかに未来を語っていた。決してくることのない未来を、確かにくると思いこんでいる。いまの言葉の無意味なことを、少女は知らない。虚しい夢であることに気がついていない。
「看護婦さんになる前に、一度ヨーロッパに行ってみたいんです」
「あまり話すと、また呼吸が苦しくなるから、もう休みなさい」
私は熱のある少女の額に軽く掌を触れて、病室を出た。
少女が息をひきとったのは、それから五日あとだった。
少女は沢山の未来を語って死んだ。お義母さんにも、お父さんにも、看護婦にも、私にまで語り、明け方、話すのに疲れたように死んでいった。冷たくなった死体が去ったあとには、白いマットの上に、小さな凹みだけが残った。
その上に、また明るい朝の陽が射しはじめていた。
つい少し前まで、少女が語っていた無数の未来はどうなったのか。あれほど真剣に語られた未来は、どこに葬ればいいのだろうか。
若い人が死んだあとにはいつもそんな虚しさと戸惑いが残る。

悪魔の知識

知っている、ということは、果たして幸せなことなのだろうか。

人間は知ることによって進歩する。体験し、知識を積み重ねることによって、豊かになり、深みも増す。知らないより、知るにこしたことはない。

だが、ときに知りすぎて不幸になることもある。

知らないがゆえに、かえって心安んじていられることもある。

死に至る病のときも、その一つの例かもしれない。

私が医師になって三年目のときに、K先生が亡くなられた。先生は外科学の大家で、すでに何冊かの著書もあった。専攻は腹部外科で、その手術は水際だっていた。

メス捌き(さば)きは、専門家が見ても感動するほどの、一つの芸術であった。

そのK先生が胃癌で倒れられた。医者の不養生というが、注意していても気付かぬことがある。実際、注意してわかるくらいなら、癌で死ぬ人は、もっともっと減るだろう。

このあたりのことは、癌のできた位置や条件にもよる。K先生の場合は、不運だったとしかいいようがない。

癌とわかった時点で、弟子達は先生に、そのことを告げるべきか否か悩んだ。
素人なら隠すという手もある。だが専門家の医師には、すぐわかってしまう。小細工を弄するより、はっきり話して、手術をすすめたほうがいいだろう、ということになった。
そのことを告げると、先生は素直にうなずかれた。
ただちに開腹手術がおこなわれたが、癌はすでに胃から後腹膜まで、転移していた。
医師達はやむなく、胃の閉塞している部分だけ切り摘って引き揚げた。
いわば、一時しのぎの手術であった。
「どうだった」
手術のあと、先生にきかれて、弟子達は口裏を合わせて答えた。
「早かったので、なんとか全部切り摘ることができました」
摘りきれなかったということは、即、死を意味する。さすがに医師達は、そこまではいいかねた。
「ありがとう」
先生は一言言われただけだった。

手術後、一時、先生はかなり元気になられた。
一カ月もすると退院され、陽気のいいときは、自宅のまわりを散歩できるようになった。
だが、それから三カ月後に、先生の容態は再び悪化した。今度は黄疸もでて肝臓まで癌が拡がってきているのがわかった。

すでに手術の手段はなかった。
抗癌剤でわずかに癌の発育をとどめても、それは死期をいくらか遅らせるだけの効果しかなかった。
手術をした医師達は、ひたすら恐縮しきっていた。
「全部摘りきりました」といって、数カ月後に再発している。いまとなっては、それが嘘だったことがはっきりしていた。もし嘘でなければ、余程、まずい手術をしたことになる。
だが先生は、なにもいわれなかった。ただ一言、「やっぱり駄目だったね」といわれただけだった。
再発した時点で、先生は自ら、死が避けられないことを知っていたに違いない。あるいはそれ以前に、手術の時点で、すでに死に至る病であることを察知されていたのかもしれない。
いずれにせよ、医師達の小細工は無意味であった。いまさら、なまじっかな慰めなど、先生には通用しない。
それにしても、先生の態度は堂々としていた。死を目前にして、動揺している気配はなかった。さすが、高名な先生だけのことはあると、みなが感嘆した。

だが、再発がはっきりして半月くらい経ってから、先生の様子が変わってきた。
深夜、病室で低く喚（わめ）くような声がきこえるかと思うと、突然叫び出す。
「いやだ、いやだ、死にたくない」「助けてくれえ」
その声が、寝静まった病棟に響く。
看護婦が駆けつけると、先生はベッドの上で、子供のように手足をばたつかせて泣いていた。また

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com